

# 留学後の学生に対する支援のあり方

－留学経験を価値あるものにするために－

一般社団法人日本私立大学連盟  
国際連携委員会

はじめに

## I. 留学後の学生に対する支援状況

1. 経験の報告・還元・共有
2. モチベーションの維持・向上
  2. 1 留学希望者・留学生との交流（コミュニケーションを中心とした取組）
  2. 2 スキルアップ（語学力を中心とした取組）
  2. 3 留学のカリキュラム化（留学の成果を高めるための取組）

## II. 今後の課題

1. 単位の認定・付与
2. 進路選択支援（特に、海外大学院への進学支援）
3. 質的効果測定
  3. 1 留学の成果（学生の成長）の可視化
  3. 2 大学としての成果の可視化

はじめに

日本私立大学連盟国際連携委員会では、平成 26 年度の検討成果として『派遣留学に関するスキーム－平成 26 年度中間まとめ－』<sup>1</sup>（以下、「平成 26 年度まとめ」とする）を作成した。

その後、「平成 26 年度まとめ」に示した学生の大学生活期間を中心に据えた時間軸の段階ごとに検討を進め、平成 27 年度には留学の前段階、特に大学入学以前の時期を意識した『大学生になったら留学しよう！高校生のための留学 Q&A』<sup>2</sup>を、平成 28 年度には、留学期間中を意識した『海外留学の促進に向けて－危機管理のためのトラブル事例共有－』<sup>3</sup>（以下、「平成 28 年度まとめ」とする）を、平成 29 年度前半においては、加盟大学の協力を得て、「平成 28 年度まとめ」の内、事例集の改訂版<sup>4</sup>を作成した。

派遣留学を検討テーマとして取り組んで 4 年目となる平成 29 年度は、これまでの検討で着手できていなかった「留学プログラムからの帰国後」、特に帰国学生に対するフォローアッププログラムに焦点を絞って検討を行った。

<sup>1</sup> 一般社団法人日本私立大学連盟国際連携委員会『派遣留学に関するスキーム－平成 26 年度中間まとめ－』平成 27 年 3 月

<sup>2</sup> 一般社団法人日本私立大学連盟国際連携委員会『大学生になったら留学しよう！高校生ための留学 Q&A』平成 28 年 3 月

<sup>3</sup> 一般社団法人日本私立大学連盟国際連携委員会『海外留学の促進に向けて－危機管理のためのトラブル事例共有』平成 29 年 3 月

<sup>4</sup> 一般社団法人日本私立大学連盟国際連携委員会『海外留学の促進に向けて－危機管理のためのトラブル事例共有－』「Ⅲ. 大学における海外留学トラブル事例集」平成 29 年度改訂版、平成 29 年 10 月

当連盟の「国際教育・交流調査 2016」<sup>5</sup>の結果によると、加盟大学における平成 27 年度間の日本人学生海外派遣数は 28,447 名であり、平成 24 年度間に比較して約 5,000 人増加している。留学期間別で内訳をみると、協定制度の有無にかかわらず、1 カ月未満の人数がその大半を占めている（協定制度あり 10,752 人。協定制度なし 6,168 人）。

「平成 26 年度まとめ」においては、「長期留学への足掛かりとして短期留学に挑戦」して長期留学にステップアップしていくこと、および留学後「留学経験に付加価値を創出」することが、今後の派遣留学促進・支援において重要であるとの認識を得た。特に、留学期間の長短に関わらず、留学経験をその後の学生生活、ひいては人生における有益な時間・経験とするためにも、留学経験を活かした自己成長をより促すためのフォローアッププログラムが重要であるとの認識に至った。

最近では、BEVI-j<sup>6</sup>の登場が示すように、「留学の質的効果をいかに測るか」という視点も重視されつつあるが、各大学においてはすでに各種の取組により、学生の留学経験をより豊かなものとする努力を重ねてきている。

ここでは、当委員会委員所属大学の取組を中心とした検討・分析から、現在行われている帰国後のフォローアッププログラムの現状を知り、今後の課題等についてまとめた。しかし、これらの取組は各大学の実情に合わせて検討が進んでいる状況にあり、現段階でその方向性を確定する時期ではないと認識する。

本報告により、加盟大学との間で現状の取組の一例を共有し、そこから今後の留学後の学生に対する支援のあり方について考えていくきっかけとなれば幸いである。

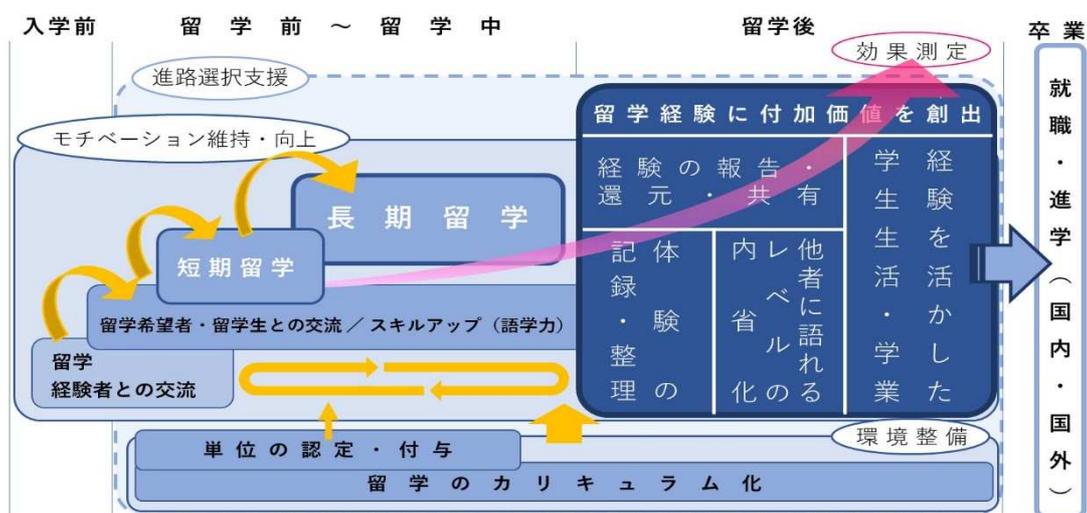


図 1 学生の時間軸と留学に関する各種取組

<sup>5</sup> 一般社団法人日本私立大学連盟国際連携委員会「『国際教育・交流調査 2016』トピックス」平成 29 年 11 月 24 日、当連盟 web サイト内にて公開。

※いずれも、一般社団法人日本私立大学連盟 web サイト→事業内容→国際交流に掲載（上記 3、4 及び 5 は会員専用ページでの公開となる）<http://www.shidairen.or.jp/>

<sup>6</sup> BEVI (Beliefs, Events, and Values Inventory) とは、グローバル人材力を測定するとともに、留学の学習成果を客観的に測定する手段として、アメリカ国立科学財団(National Science Foundation, NSF)\*、米国・カナダの約 60 の高等教育機関で広く取り入れられている学習成果分析テストのこと。日本においては、広島大学が日本版 BEVI-j を完成した。

\*アメリカ合衆国の科学・技術を振興する目的で 1950 年に設立された連邦機関

## I. 留学後の学生に対する支援状況

### 1. 経験の報告・還元・共有

- 報告書作成、アンケート実施、事後講座等を通じた留学経験振返り、報告会や説明会でのプレゼン等が取組の中心となっており、留学希望者や留学生のアドバイザー制度等を実施している事例が多い（下記「2. 1 留学希望者・留学生との交流（コミュニケーションを中心とした取組）」も併せて参照）。
- 経験の報告・還元・共有にあたっては、プログラム目的を踏まえた自分なりの「体験の記録・整理」を行った上で、「他者に語れるレベルの内省化」を経て行われること、経験を活かした学生生活を送り、学業を充実させていくことが望ましい（図1参照）。  
このプロセスにおいては、学生自身の取組だけでなく、ゼミナール担当教員や関連部署の職員の助言が重要である。

#### 参考事例

留学前にその目的等を明確化し、留学期間中や帰国後に振返りを行うためのシート記入等（シートに明示されることにより、具体的にそのことを考え、記入することが可能となる）。

- ・(例)「短期語学研修ビジョン設定シート」

留学前に目的・身につけたいスキル・帰国後のイメージを明確にし、目標達成度を事後研修時に分析して記入する。

- ・(例)「長期留学目標設定シート」

上記とほぼ同内容であるが、留学開始6週間後の評価も行う。

### 2. モチベーションの維持・向上

- モチベーションの維持・向上には、他者とのコミュニケーションを中心とした「留学希望者・留学生との交流」、語学力の維持・向上を目的として行われる語学試験受験や、一定の語学力を持つことを条件に受講を許された講義等を履修する「スキルアップ」、留学プログラムの前後を含めて、その成果を高めるための科目を提供する「留学のカリキュラム化」等が、取組として整備されている。

#### 2. 1 留学希望者・留学生との交流（コミュニケーションを中心とした取組）

- 基本的に大学としてのプログラムが設計・設定されているが、その先の活動は学生の自主性に任されている。
- 課題として、留学経験者全員に体験してもらえないこと、特定の学生にその役割が集中すること等が挙げられている（報告会や説明会でのプレゼン等も同様）。

#### 参考事例

- ・早稲田大学「学生留学アドバイザー」

留学センター所属のボランティア団体。留学センターが提供する中長期留学プログラムに参加した学生によって構成されており、1年間の活動費の一部を大学予算で負担。学生目線での支援企画の実施や情報誌発行活動を展開。

<https://www.waseda.jp/inst/cie/from-waseda/advisor>

## 2. 2 スキルアップ（語学力を中心とした取組）

- 語学検定試験等による効果測定においては、全員に受験を義務づけている場合は、卒業までの目標値設定（特定の学部・学科においては卒業要件として設定）、目標を達成できない場合の補習課題等が用意されている事例がある。
- 高度な語学力を要するプログラム開講・受講も用意されており、有料の場合は補助制度による受講支援、正課扱いとして単位認定を行う等の対応をしている事例がある。
- スキルアップ（語学力を中心とした取組）に関しては、継続的なスキルの維持・向上が必要となることから、帰国後の一時的な到達度確認にとどまらないフォローアッププログラムを用意し、学生の自主的な利用を促す事例がある。

### 参考事例

- ・愛知大学「グローバル・リーダー育成プログラム」  
グローバル人材の育成およびキャリア支援の一環として、一定の英語力を持つ学生を対象として開講。  
<https://www.campus-english.jp/g-aichi>
- ・同志社大学「AKP 科目」「KCJS 科目」「スタンフォード大学科目」  
それぞれ、13 のアメリカの有力大学による 2 つのコンソーシアムが、スタディアブロードプログラムを同志社大学学生へ一部開放。高度な英語力が必要。2 単位取得。  
[http://international.doshisha.ac.jp/study\\_abroad/akp/akp.html](http://international.doshisha.ac.jp/study_abroad/akp/akp.html)  
[http://international.doshisha.ac.jp/study\\_abroad/kcjs/kcjs.html](http://international.doshisha.ac.jp/study_abroad/kcjs/kcjs.html)  
[http://international.doshisha.ac.jp/study\\_abroad/stanford/stanford.html](http://international.doshisha.ac.jp/study_abroad/stanford/stanford.html)
- ・同志社大学「チュービンゲン大学科目」  
高度なドイツ語力が必要。2 単位取得。  
[http://international.doshisha.ac.jp/study\\_abroad/tub\\_program/tub\\_program.html](http://international.doshisha.ac.jp/study_abroad/tub_program/tub_program.html)
- ・法政大学「交換留学生受入プログラム」  
高度な語学力が必要。科目により取得単位数は異なる。  
<http://www.global.hosei.ac.jp/programs/oncampus/esop/>

## 2. 3 留学のカリキュラム化（留学の成果を高めるための取組）

- 留学後のモチベーションの維持・向上を支える（支援する）ためには、環境整備が重要となる。  
その方策のひとつが、留学プログラムの前後を含めて、留学プログラムの成果を高めるための科目提供を可能とする「留学のカリキュラム化」である。
- 各大学においては、個々の留学プログラムの実施目的に適した形で留学前後における準備とフォローアップ科目（例えば、自分の言葉で目標設定し、終了後の達成度の確認・振り返りを行う等）を設けており、これを具体化した材料（記入シート等）を提供している事例もある（上記「1. 経験の報告・還元・共有」の参考事例参照）。
- 短期留学かつ単位認定がある留学プログラムについては、プログラム本体とフォローアッププログラムがセットで企画・実施されている事例が多い。
- 海外でのインターンシップやボランティア等の場合は、フォローアッププログラムまでセットで企画・実施されている事例がある。

- 長期留学については、留学成果のひとつである語学力の維持・向上のために、語学検定試験を導入している事例がある。
- 特に、グローバル教育に力を入れている大学においては、留学前・留学・帰国後が一体化した科目を設置している事例もあり、留学そのものを支える体系的な取組と考えられる。

#### 参考事例

- ・上智大学「グローバルゼーション特殊講義2 【帰国後の大学での学びにいかに関与経験を結びつけるか?】」

同1では、【海外の大学への留学に備えて】がサブタイトルとなっており、留学前・帰国後の指導がセットになっている。

<https://www.sophia.ac.jp/jpn/studentlife/risyu/syllabus.html> (左記より科目名検索)

- ・関西大学「グローバル科目群」

大学が目指す「グローバル人材育成」のため、グローバルな視野を養い、経験を重ねることを目的とした科目群で、初年次に異文化理解、海外留学準備を行い、在学中に海外留学、帰国後もイマージョン教育によりさらに能力を伸ばさせるといった履修モデルを想定している。

<http://www.kansai-u.ac.jp/allcom/curriculum.html>

- ・龍谷大学「留学体験に基づくキャリアディベロップメント」

留学を終えた学生向けに、その経験から何を学び今後どう生かすかを分析し、残りの学生時代、就職活動、長期的なキャリア設計等を考える機会とする。

<https://capella.ws.ryukoku.ac.jp/RSW/SYLD110Init.do?jsessionid=3757AFACF08A6351AC8BB5B1F6AA6EF> (左記より科目名検索)

## II. 今後の課題

### 1. 単位の認定・付与

- 当委員会における過去数年の検討において、必ず課題のひとつにあがる事項である。  
大学によって、あるいは学内においても対応や意見が異なるところであるが、例えば、休学留学や学外プログラムに参加した場合等の単位の認定・付与については、一定の方策を検討する必要があると考える。

### 2. 進路選択支援（特に、海外大学院への進学支援）

- 進路選択支援（広い意味での進路選択。特に就職に関しては、留学期間中に日本を離れていることを「補う」支援と、留学経験を「活かす」支援がある）については、「個別対応」を中心に一定程度取組が進んでいる。
- 一方において、今回は、海外大学院への進学支援に関する具体的な大学としての取組事例は出てこなかった。  
現状は、海外大学院への進学支援を担当する部署がない大学が多いと想定されること、希望者への個別対応を行っていること、また、進学経験者による自主的な進学希望学生向けの情報提供等の活動に頼っている面も大きいため、今後の課題のひとつと考えられる。

### 3. 質的効果測定

#### 3. 1 留学の成果（学生の成長）の可視化

- 上記「I. 帰国学生への支援状況ー1. 経験の報告・還元・共有」にも記載したとおり、経験の報告・還元・共有にあたっては、プログラム目的を踏まえた自分なりの「体験の記録・整理」を行った上で、「他者に語れるレベルの内省化」を行うことが大切であり、ここまでの取組を含めて、留学の成果（学生の成長）ととらえていくことが重要である。
- 一方において、上記のような成果は数値化しにくく測定が困難であることから、「質的効果」を測定する必要性が生じているとも考えられる。  
学生自身の成長のきっかけとして、留学経験を経た自己の変化を自覚することの効果は大きい。ポートフォリオ等の活用も含めて、質的効果を把握することは今後重要性が増すものとする。

#### 3. 2 大学としての成果の可視化

- 「はじめに」に記した通り、帰国後の学生に対するフォローアッププログラムは、各大学においてその検討や体系化に着手したばかりであり、現段階において方向性を出す時期ではないと考える。
- 「質的効果」の測定については、BEVI-j等の評価指標が登場しているが、まずはプログラム目的に照らした成果と、それに適したフォローアッププログラムの設定が必要である。
- 現状は、「アンケート」「事後講座等のフォローアッププログラム」を行っていても、「次に活用しきれていない」「事後測定できていない」事例が見受けられることから、留学プログラムの改善と、さらなる質の向上につなげるために、改善の仕組み（PDCA サイクル）を適切に機能させることが必要となる。
- 大学としての成果の可視化においては、上記「3. 1 留学の成果（学生の成長）の可視化」が、重要な役割を果たすと考える。
- 第3期認証評価においては、内部質保証をこれまで以上に重視する方向が打ち出されていることから、特にグローバル教育に力を入れている大学にとっては、留学成果も含めた学習成果をいかに測定（可視化）し、さらなる教育の質の向上のためのPDCA サイクルにつなげていくかが重要となってくる。

以 上